

【書評・追悼文】

フランク・リヒテンバーク氏

『トアバイタ語参照文法』を通して見る 「東南ソロモン語群の二重否定について」*

落合 いずみ
京都大学

キーワード：オーストロネシア語族 オセアニア語派 トアバイタ語 記述言語学 二重否定

1 はじめに

本稿が紹介するのは『トアバイタ語参照文法』(Lichtenberk 2008a)である。本書第1章の説明によるとトアバイタ語はソロモン諸島マライタ島の西北部で話される言語であり、オーストロネシア語族オセアニア語派に属する。トアバイタ語に関する先行研究の歴史は比較的浅く、1920年代(Ray 1926)に始まる¹。しかもトアバイタ語に関する文献は少なく詳細な記述がなされてこなかったようである。1981年からトアバイタ語を研究し始めたリヒテンバークは1984年にトアバイタ語の文法概略を執筆する(Lichtenberk 1984)。それから24年後に、本書『トアバイタ語参照文法』が完成する。

本書はドゥ・グロイタームートン社の参照文法叢書の中の1つであり、現時点(2017年3月)において72種類の言語の参照文法が出版されている²。また現時点でオーストロネシア諸語を扱った叢書は本書、トアバイタ語(Lichtenberk 2008a)を含め6つであるが(マドゥラ語(Davies 2010)、キリヴィラ語(Senft 2011)、トゥカンベシ語(Donohue 2011)、ビカウ・タウマコ語(Næss and Hovdhaugen 2011)、リンガラク語(Barbour 2012)³)、本書はこれらオーストロネシア諸語の参照文法の中で最も早く出版されている。

本書の大きな特徴は頁数の多さにある。本書は1356頁という膨大な頁数を有し第一巻(676頁まで)と第二巻(677頁から)の二冊から成る。この頁数はドゥ・グロイタームートン社の叢書の中でも群を抜き、1658頁の中央アラスカ・ユピック語(Miyaoka 2012)と1370頁のスレイビー語(Rice 2011)に次いで3番目に多い。膨大なページ数を誇る本書は40にも及ぶ章と付録

* 草稿に対しご助言をいただいた野島本泰氏と内藤真帆氏にお礼申し上げる。なお本稿の不備はすべて評者の責任である。

¹ 当時は Malu または Malu'u という言語名で呼ばれたと言う(Lichtenberk 2008a:3)。

² ただし中には欠番の叢書もある。

³ 叢書での言語名は Neverver である。

(2つの談話資料)から構成される。本書についてポーリー (Pawley 2015) はリヒテンバーク氏への追悼文の中で以下のように述べている。

The To'aba'ita grammar is among the most comprehensive ever done of any non-Indo-European language⁴ (Pawley 2015:577).

評者も同感である。本書は「精緻」の一言に尽きる。本書中の例文はほとんどが談話を書き起こしたテキストを基にしており、書き起こしの作業に費やした年月と労力の膨大さを物語る。またこれらの例文によって示される文法的項目の1つ1つを分析・整理・編成し、同時に言語を記述するための文章を紡ぐ作業に費やした年月と労力の膨大さも読み手に迫るものがある。

また、ポーリー (Pawley 2015) はリヒテンバーク氏が文法研究に並んで語彙的研究も重視していたことを述べている。このリヒテンバークの言語研究に対する考えは2008年においてトアバイタ語の参照文法 (Lichtenberk 2008a) と同時に辞書 (Lichtenberk 2008b) も出版していることから見て取れる。文法的・語彙的考察の関連性についてリヒテンバークが残した言葉をポーリー (Pawley 2015:577) が引用している箇所が以下である⁵。

Detailed grammatical analysis enabled a more accurate treatment of the grammatical elements in the dictionary than would have been the case otherwise. And the lexicographical work has been of great importance to the grammatical analysis. In any language, grammatical rules, patterns are of highly different degrees of generality. Few, if any, hold across the board. Many grammatical patterns are lexically sensitive; they hold for some but not all members of a certain word class. Grammatical rules, or patterns, are generalizations over various properties of individual lexical items. One cannot write a reasonably detailed grammar of a language without fairly extensive lexical information. (Lichtenberk 2008a:6)

2008年出版の本書であるが、9年後の現在あえて本書の書評を記すことにしたのは2015年に他界した著者、故フランク・リヒテンバーク氏を偲び追悼の念を著わすためである。本稿は『トアバイタ語参照文法』から、まず第3章 ‘Grammatical profile’ 「文法概略」を要約する (本稿2節)⁶。『トアバイタ語参照文法』のその他の章は各文法項目の詳細な記述であるが紙幅を鑑み第17章 ‘Negation’ 「否定構文」のみを紹介する。この1つの章を通して著者が1つの章、1つの文法項目を丹念に組み立てていることを理解してもらいたい。否定構文の中でもとりわけ二重否定構文に重点を置くが、これは次節で紹介する内容の橋渡しの役目を担う。評者はリヒテンバーク氏の最期の学会発表であったと思われるオーストロネシア諸語・パプア諸語国際言語学会に居合わせた。発表題目は ‘Double negation in Southeast Solomonic languages’ (Lichtenberk

⁴ Toqabaita と To'aba'ita [toʔabaʔita] は綴りは異なるが同一の言語を指す。リヒテンバークの表記では声門閉鎖音は *q* で表すことに留意されたい。

⁵ Pawley (2015:577) の引用部では *generality* の直後がコンマであるが、本書 (Lichtenberk 2008a) に従いピリオドに改めた。

⁶ トアバイタ語の音素目録と表記方法については Lichtenberk (2008a:40) を参照されたい。

2014) であり、リヒテンバーク氏の発表を初めて聞いた評者はこの発表に感銘を受けた。本稿第 4 節ではその発表概要を紹介する。

2 トアバイタ語文法概略

トアバイタ語の語順は主語—述語—その他である。自動詞は SVX (1)、他動詞は AVOX (2) の順である⁷。S と A の人称は動詞の前に置かれる主語標識によって表される。主語標識はさらに時制、アスペクト、否定などの文法範疇も示す。例えば、例 (1) の *ku* は一人称を表すと同時に非未来という時制を表す。またトアバイタ語は主要部標示型の言語であり、例 (2) にあるように直接目的語は接辞として動詞に付加する。

(1) Lichtenberk (2008:44)

Nau ku thaofa.
1SG 1SG.NFUT be.hungry
'I am hungry.'

(2) Lichtenberk (2008:44)

Nau ku riki-a doqora-mu i maa-na uusi-a.
1SG 1SG.NFUT see-3.OBJ sibling-2SG.PERS LOC point-3.PERS buy-DVN
'I saw your brother at the market place.'

普通名詞が単独で現れる場合は単数を表す (3)。普通名詞の後に *ki* という標識が置かれると複数を表す (4)⁸。代名詞には単数・双数・複数の区別の他、包括形・排他形の区別がある。

(3) Lichtenberk (2008:47)

kali wela naqi
little.SG child this
'this little child'

(4) Lichtenberk (2008:48)

kaala wela naqi ki
little.PL child this PL
'these little children'

所有表現には 2 つの構文があり、所有者と所有物との関係によってどちらの構文を用いるかが決まる。譲渡不可能の場合は接辞形の人称代名詞で表す (5)。譲渡可能な場合は主語標識の人称代名詞で表す (6)。

(5) Lichtenberk (2008:49)

thaina-da
mother-3PL.PERS
'their mother'

(6) Lichtenberk (2008:49)

biqu kera
house 3PL
'their house'

⁷ S は自動詞の主語、A は他動詞の主語、V は動詞、O は目的語、X はこれら以外を表す。

⁸ これらの例に現れる形容詞の形式は数に応じて変化する (Lichtenberk 2008:47)。

次節ではこれらの文法スケッチを基にトアバイタ語の否定構文 (本書第 17 章) について概観する。

3 トアバイタ語の否定構文

トアバイタ語の否定構文は 3 種類に分けられる。1 つ目は (i) 単一否定構文、2 つ目が (ii) 語彙的否定、3 つ目が (iii) 二重否定構文である。(i) 単一否定構文では否定は主語標識に *si* という音配列として組み込まれている (7)。否定を表す部位はこの主語標識のみである。この構文は用いられる主語標識が否定を表す替わりに時制・アスペクトを表す機能が無く、否定文において時制・アスペクトの区別が中和される。(ii) 語彙的否定構文では、否定の要素は *aqi* という否定動詞によって表される (8)。この否定動詞は ‘not be so’, ‘not be the case’, ‘no exist’, ‘not be available’ など広範な意味を持つ。以下例文における太字は評者による⁹。

単一否定構文

(7) Lichtenberk (2008:734)

Keeroqa kesi fula.

3DU 3DU.NEG arrive

‘The two of them did not arrive.’

語彙的否定構文

(8) Lichtenberk (2008:734)

A: *Qo riki-a naqa?*

2SG.NFUT see-3SG.OBJ PRF

B: *Qe=aqi.*

3SG.NFUT=not.be.so

A: ‘Have you seen it?’

B: ‘No.’

例 (7) のような (i) 単一否定構文に比べ (iii) 二重否定構文のほうがより頻繁に用いられる。二重否定構文は (9) のように定式化される。

(9) Lichtenberk (2008:741)

(NP) [*qe aqi*] [negative.event.clause]

統語構造的に最下層に位置する否定構文節 (negative event clause) は (i) 単一否定構文の形式を採る。この否定構文節はさらに否定動詞 *aqi* に先行され、この否定動詞はさらに主語標識として三人称単数・非未来の *qe* を携える。第一要素として現れる名詞句は否定構文中の主語が主題化された場合に現れる位置を示したものであり必須ではない。二重否定構文の例を (10) に挙げる¹⁰。

⁹ 以下例文中に見られる = は、直後の要素が接語であることを示す。

¹⁰ 本書では例文に括弧を用い統語構造を示しているが、ここでは括弧を除いている。

二重否定構文

(10) Lichtenberk (2008:741)

Qe aqi kwasi riki-a.

3SG.NFUT NEG V 1SG.NEG see-SG.OBJ

‘I haven’t seen him.’

否定動詞 *aqi* に加え、否定構文節中の主語標識 *kwasi* が否定を表すことから、二重の否定が用いられていることになる。このような二重否定構文は一重否定構文に置き換えることも不可能ではない。しかし否定構文の主語が三人称の場合は二重否定構文が好まれる傾向がある。この傾向を示す例文が (11) である。一行目の三人称主語の節では二重否定構文が、二行目の一人称主語の節では単一否定構文が用いられている。

(11) Lichtenberk (2008:743)

Nia e=aqi si naqo-fi nau,

3SG 3SG.NFUT=NEGV 3SG.NEG face-TR 1SG

nau kwasi naqo-fi-a.

1SG 1SG.NEG front-TR-3.OBJ

‘She would not face me, (and) I would not face her.’ (In earlier times, this was the proper way for a man and a woman who were not husband and wife to be positioned when speaking to each other.)

二重否定構文の由来について、リヒテンバークが意見を述べた箇所がある (Lichtenberk 2008:747)。本来単一否定構文であったものが、否定動詞 *aqi* を導入し二重否定構文とすることにより何らかの強意を表すようになったのではないかと述べている。この否定構文の変遷について東南ソロモン語群にまで広げて考察したのが次節で紹介する Lichtenberk (2014) である¹¹。

4 「東南ソロモン語群の二重否定について」 (Lichtenberk 2014)

オーストロネシア語族オセアニア語派における下位分類に東南ソロモン語群がある。これはさらに 2 分岐するがそのうちの 1 つ、クリストバル・マライタ語群 Cristobal-Malaitan はさらに (a) 中央・北マライタ語群 Central and North Malaita、(b) 南マライタ・クリストバル語群 South Malaitan-Cristobal、ロング語 Lonngu に 3 分岐する。(a) に含まれるのがトアバイタ語、ラウ語 Lau、クワラアエ語 Kwaraqae、クワイオ語 Kwaio などであり、(b) に属するのがアレアレ語 ‘Are‘are、ウラワ語 Ulawa などである。リヒテンバークは (a) 中央・北マライタ語群祖語において二重否定構文を創るという改新が起きたと主張し、トアバイタ語、ラウ語 (Featherstone-Santosuosso 2011)、クワラアエ語 (Macdonald 2010)、クワイ語 (Keesing 1985) から例文を引用している。以下、トアバイタ語以外の例文を挙げ、否定要素を太字で示す。

¹¹ 第 4 節は評者が聞いた 2014 年 5 月のリヒテンバーク氏の口頭発表の内容をまとめたものであるが、評者の記憶と当日の配布資料を基にしており、リヒテンバーク氏の主張を完全に理解しているとは言い難い。不備はすべて評者に帰する。

(12) Lau (Featherstone-Santosuosso 2011:35)

Daalu langi dali=si dao ua mai.

3PL NEG 3PL.SBJ=NEG arrive still VENT

‘They haven’t yet arrived.’

(13) Kwara’ae (Macdonald 2010:348)

Bat nouaq keil kas dao qua an kual ...

but NEG 1PL(EXCL) NEG arrive yet LOC place

‘But we still didn’t reach the place...’

(14) Kwaio (Keesing 1975:181)

‘Oo sia age-a mone.

2SG NEG do-3.OBJ NEG

‘You can’t do it.’

本発表の要点は単一否定から二重否定構文が作られるようになった過程にある。二重否定構文には二つの否定要素が含まれる。1つはトアバイタ語の主語標識に用いられている音配列 *si* であり、他の中央・北マライタ語群の言語においても共通してみられる要素 (ラウ語 *si*、クワラアエ語 *kas* の最終音 *s*、クワイオ語 *sia*) である。この否定要素はクリストバル・マライタ語群祖語として **sia* と再建されたとする。もう1つの否定要素は **sia* の反映形よりも前に現れる形式でありトアバイタ語の *aqi*、ラウ語の *langi*、クワラアエ語の *nouaq*、クワイオ語の *mone* に当たる。

トアバイタ語を例にとると、否定要素の *si* と *aqi* のどちらが旧来の否定形式であり、どちらが新しく二重否定構文の否定形式として加わったものであるかという疑問が起こる。そこでまずリヒテンバークはトアバイタ語において *si* が指小辞として用いられることを提起した (15)¹²。さらに文法化の傾向として部分詞や指小辞が二重否定の新たな否定要素として加わるということが多くを喚起した。

(15) Lichtenberk (2014)

si malefo qeri

DIM money that

‘that small amount of money’

この議論の流れでは旧来の否定要素は *aqi* であったが、新たに指小詞の *si* が二重否定の第二否定要素として加わるようになったということになる。

ところがリヒテンバークの主張はそうではない。彼の主張は、*si* が本来の否定要素であったが、新たな否定要素 *aqi* が改新によって二重否定に取り込まれたというものである。その根拠になるのが否定要素 **sia* (クリストバル・マライタ祖語) の歴史的な古さである。もう1つの否

¹² Lichtenberk (2014) は同様の用法がラウ語にも見られることにも言及している。

定要素は各言語に特有の形式を呈しているため、各言語において比較的最近起きた改新と考えられるということであった。

5 おわりに

ポーリー (Pawley 2015:577) が追悼文においてリヒテンバーク氏の研究態度をよく表すものとして引用したと思われる言葉は 1 節で紹介した。この言葉は本書第 1 章「序論」からのものだが、この引用部分の直後 (第 1 章の最終段落) に、最も評者の胸を打った言葉が現れる。

While my aim has been to produce a relatively detailed grammatical analysis of Toqabaqita, it would be naïve indeed to think that the present description is anywhere near comprehensive. Given the richness and complexity of human languages, and the fact that fully-functioning languages are not fixed, either lexically or grammatically, writing a fully comprehensive grammar of any such language is an unattainable goal in principle. It is with that in mind that this grammatical description of Toqabaqita is presented here. (Lichtenberk 2008a:6)

リヒテンバーク氏の言語記述研究に対する謙虚で真摯な姿勢が伺える。リヒテンバーク氏の心構え—1 つの言語を完全に記述することは不可能だということを理解した上で、できる限りを尽くし詳細な分析を提示するという姿勢は、言語の記述に携わる者に対する警鐘であると重く受け止めたい。

略号

1: first person, 2: second person, 3: third person, DIM: diminutive, DU: dual, DVN: deverbal noun, EXCL: exclusive, LOC: locative, NEG: negative, NEGV: negative verb, NFUT: nonfuture, OBJ: object, PERS: personal, PL: plural, PRF: perfect, SBJ: subject, SG: singular, TR: transitive suffix, VENT: ventive

参考文献

- Barbour, Julie (2012) *A grammar of Neverver*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Davies, William D. (2010) *A grammar of Madurese*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Donohue, Mark (2011) *A grammar of Tukang Besi*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Featherstone-Santosuosso, Giordana A. (2011) Lau of North Malaita, Solomon Islands: A language description. Master's thesis, University of Auckland, Auckland.
- Hill, Deborah (1992) Longgu grammar. Doctoral dissertation, Australian National University.
- Ivens, Walter G. (1929) *A dictionary of the language of Sa'a-Mala-and Ulawa, South-East Solomon Islands*. Oxford: Oxford University Press.
- Keesing, Roger M. (1985) *Kwaio grammar* [Pacific Linguistics, B 88]. Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.

- Lichtenberk, Frank (1984) To'aba'ita language of Malaita, Solomon Islands. *Anthropology Department Working Paper*, No.65. University of Auckland.
- Lichtenberk, Frank (2008a) *A grammar of Toqabaqita*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lichtenberk, Frank (2008b) *A dictionary of Toqabaqita (Solomon Islands)*. Canberra: Pacific Linguistics.
- Lichtenberk, Frank (2014) Double negation in Southeast Solomonic languages. Paper presented at the Seventh Austronesian and Papuan Languages and Linguistics Conference, School of Oriental and Asian Studies, University of London, May 16-17.
- Macdonald, Daryl Eveline (2010) A grammar sketch of Kwaraqae. Doctoral dissertation, University of Waikato.
- Miyaoka, Osahito (2012) *A grammar of Central Alaskan Yupik (CAY)*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Naitoro, Katerina (2013) A sketch grammar of 'Are'are: The sound system and morpho-syntax. Doctoral dissertation, University of Canterbury.
- Næss, Åshild and Even Hovdhaugen (2011) *A grammar of Vaeakau-Taumako*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Pawley, Andrew (2015) Frantisek (Frank) Lichtenberk, 1945-2015: A tribute. *Oceanic Linguistics* 54:573-583.
- Ray, Sidney H. (1926) *A comparative study of the Melanesian island languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rice, Keren (2011) *A grammar of Slave*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Senft, Gunter (2011) *Kilivila*. Berlin: Mouton de Gruyter.

受理日 2017 年 3 月 31 日